

鮮やかな夏の初体験③

～お互いの大事なところ舐めあお？クンニ&フェラ編～

※この作品に登場する人物はすべて 18 歳以上の成人です。実在の未成年・学校・団体とは関係ありません。

駅前の雑踏を抜け、里桜のお気に入りの飲食店に入った瞬間から、俺の財布はすでに戦々恐々としていた。

テーブルの上には、すでに戦場の跡が広がっている。

溶ける寸前のパフェの残骸、クレープの包装紙、そして今、里桜がスプーンで丁寧にすくっているバニラアイスクリーム。

彼女はもぐもぐと頬を動かしながら、いかにも幸せそうな表情を浮かべていた。

「それにしてもよく食べるな……」

俺は思わずぼやいた。

今日の支払いはいくらになるのだろう。

夏休み中はバイトを増やしているとはいえ、薄くなっていく財布を思うと、胸の奥がわずかに痛む。

「孝史があんなことさせるからでしょ」

里桜は口の中のアイスクリームを飲み込み、澄ました顔でそう返した。

「なあ、女の子ってさ、普段から菓子やら甘い物をたくさん食べてるけど、太らないの？」

「その代わりに、普段のご飯減らしてるから大丈夫なの。甘い物は別腹って言うでしょ？」

パフェ、クレープ、アイスクリームと立て続けに平らげていく姿は、まさにその言葉を体現していた。

やがて里桜はスプーンを置き、大きく息を吐いた。

「はあ、食べた食べた。満足です。ごちそうさまでした」

「はい、良かったです」

会計を済ませ、薄くなった財布をポケットに押し込む。

店を出ると、まだ午後の陽射しが街を優しく照らしていた。

「これからどうする？」

俺が尋ねると、里桜は少し考え込むように「ん〜」と喉を鳴らし、次の瞬間、ぱっと顔を輝かせた。

「下着売り場に行きたい！」

その一言で、俺の視界がわずかに白く霞んだ。

「ちょっと待って。もしかして、俺も？」

「当たり前じゃない。今日は久しぶりのデートなんだから」

「男が女性の下着売り場に行くなんて、ハードル高すぎるよ」

「え〜、カップルはよく一緒に下着とか選ぶよ」

「……それは聞いたことあるけどさ」

俺が逡巡していると、里桜はにこりと笑って俺の手を取った。

「ほら！　いくよ！」

「……仕方ないなあ」

やがてデパートの婦人服フロアに着く。

下着売り場の入り口が近づくにつれ、空気の質が明らかに変わった。

「うわ……女性オーラが神々しい……」

思わず足が止まる。

「孝史？」

「ねえ、里桜だけ行くのはダメ？」

「それじゃ、来た意味ないじゃん。孝史が私に着て欲しい下着を選ぶのが目的なんだから」

「いや、そうなんだけどさ……」

「ほらほら、早く行くよ」

里桜は俺の手を強く握り締め、半ば強引に聖域の中へと引きずり込んだ。

陳列棚に並ぶ無数の下着が、視界を埋め尽くす。

「下着ってさ、服も同じだけど、自分の好みばかり選んじゃうのよね。だから、男目線で孝史に選んで欲しかったんだ」

「あ、もちろん、下着代は私が出すよ」

「これはさっきのお礼でもあるんだよ。ほらほら、私に着せたい下着、選んでみてよ」

里桜は俺の背中をぽんと叩き、嬉しそうに笑う。

「やっぱり、孝史はエッチなのがいいんだよね」

「ちょ、こんな女性ばかりのところで、そんな話——」

完全にからかっている。

周囲に聞こえていないかと、俺は慌てて周囲を見渡した。

「こんなのとかどうよ？」

里桜が差し出したのは、ピンクのヒョウ柄のセットだった。

「それは里桜のキャラじゃないよ」

「だよねー。こういうのはおギャル様が着て栄える下着だよね……」

里桜は、どう見ても清楚系の女の子だった。

長くて柔らかい黒髪、澄んだ目元、控えめな笑顔。

「やっぱ、私って可愛い系？ けどさ、それだといつもの下着と変わらないだよね……。
孝史、ちょっと選んでみてよ」

里桜の色……イメージカラーは何だろう。

赤？

情熱的すぎる。

ピンク？

この前も着ていたし、いつもの可愛い系から抜け出せない。

もっと、少しだけ大人びた色。

彼女の清楚さを保ちつつ、どこか背伸びしたような――。

そう悩んでいると、ふと、一つの下着が目にとまった。

明るい紫色。

「これなんかどうかな？」

「ふうん……孝史はこういうのを私に着せたいんだ」

彼女は次の瞬間、裏面を俺の眼前に突きつけた。

「けど、これTバックだよ？」

「いや、里桜に似合うと思って……！ ほら、色とかさ！」

慌てて言い訳を並べると、里桜はくすっと笑って頷いた。

「うん、これ買う」

「一着はこれね。よし、次も選んで」

「それだけでいいじゃん。それ買って、早く出ようよ」

「ダメだよ！ 最低三着は買う予定だから」

紫、オレンジ、そして黒。

こうして俺は、里桜に着てほしい三着を選ぶことになった。

◇ ◇ ◇

「はぁ、疲れた……」

自室のドアを閉めた瞬間、私はばたっとベッドに身を投げ出した。

「けど、楽しかったなぁ〜。久しぶりのデート」

ベッドの脇に置いた紙袋を手取る。

中には、彼が選んだ下着が三着。

普段なら絶対に自分では選ばない系統のものばかりだ。

「けど……試しに、今着てみようかな？」

私は起き上がって部屋の鍵をかけた。

そして、孝史が選んだ下着を身につけてみる。

「黒かぁ……」

鏡の前に立つ。

普段とは違う自分が、鏡の中に映っている。

「ん〜……大人だ」

男の人は黒の下着が好き、という話は本当だったのかもしれない。

彼が私のために選んでくれたものだと思うと、胸の奥がほんのり熱くなる。

最近、エッチの時も孝史がリードすることが多い。

デートの計画はいつも私が立てているのに、ベッドの上では彼に先を越されてしまう。

それが、ちょっとだけ悔しい。

私は下着姿のまま、デスクの椅子に座った。

パソコンを起動する。

今日こそ、私がリードする。

エッチだって、負けっぱなしは嫌なのだ。

◇ ◇ ◇

「お邪魔します」

玄関のドアが開く音とともに、孝史の声がした。

今回は、私が自分から連絡して誘ったのだ。

今日こそ、私が主導権を握る。

「どうぞ」

「それにしても久しぶりだな。里桜の家に来るの」

「そうだね」

家族はみんな出かけていて、家の中は静かだ。

「ねえ、孝史」

「ん？ 何？」

「シャワー浴びてきてよ」

「えっ……あ、うん……わかった」

よし。

これで、今日ここに呼んだ私の意図が、彼にも伝わったはずだ。

「孝史。ちゃんと体洗ってね。特にアソコは入念にだよ？ わかった？」

「お、おう……」

初めて自分から誘う行為の前では、どうしても力が入ってしまう。

「終わったら、私の部屋に来て」

「うん。けど、いいの？」

「なにが？」

「里桜の家のお風呂場を使って。ちゃんと……体は洗ってきたよ？」

彼も、その気で来ているようだ。

「いいから！ 早くシャワー浴びてきて！ エッチなことしたいんでしょ！？」

つい、口から出てしまった。

自分で言っておいて、耳まで熱くなる。

でも、負けっぱなしは嫌いなのだ。

エッチはこれで三回目。

今日ぐらいは、私が誘ってもいいだろう。

「里桜、今日は誰もいない？」

「うん。家族はみんな出かけてるよ」

「そう……」

その言葉の直後、突然、彼の唇が私の唇に重なった。

「孝史……！？」

柔らかく、温かい感触。

すぐに舌が割り込んでくる。

キスをするたびに、脳がふわふわと軽くなる。

ずっとこうしていたい、と思わせてしまう魔力がある。

でも――。

今日はダメだ。

私がリードするんだから。

私は意を決して、唇を離した。

「ダメ。そういうのは、孝史の体がちゃんと綺麗になってから。ほらほら、早くシャワー浴びてきて」

半ば無理矢理に彼を洗面所へ押し込んだ。

ドアを閉めて、ようやく大きく息を吐く。

「ふう……」

心臓がまだ激しく鳴っている。

私は二階の自室へ向かった。

部屋に入り、カーテンを少し閉める。

そして――。

今日の計画を、もう一度頭の中で確認する。

先手を取られたけれど。

今日こそは、私の日だ。

孝史を驚かせるために、ちゃんと準備だってしてきた。

あとは――。

彼が、この部屋へやって来るのを待つだけだった。

――体験版はここまで――

里桜が密かに練習していたこととは？

孝史のために選んだ、新しい下着。

そして今回は、いつもと違って里桜から積極的に――？

二人の距離がさらに近づく「初めて」を、製品版でお楽しみください。

『鮮やかな夏の初体験③

～お互いの大事なところ舐めあお？クンニ&フェラ編～』